

## 私の『咬合と咬合器の歴史』を読んでいただいた方々へ

永田和弘 2021. 2. 25.

2020年に私は日本顎咬合学会誌に『咬合と咬合器の歴史』を投稿しました (Vol.40, P5-35, 181-212)。Part I, II の2部に分けて総60頁に亘る異例の掲載でした。現代の補綴学の根底に疑問を呈したもので、集中砲火を浴びることを覚悟の執筆でした。しかし、私の論文には全く反応がありませんでした。

強い不安の中で、数か月を過ごしましたが、そのような状況の中、2月17日に、とある先生から私の論文に感想を寄せていただきました。その内容は身に余る高い評価でした。それに加えて、ご自分の反省も加えられていました。

1960・70年代には、必死に海外の咬合・咬合器の情報を取り込み、それを理解して国内に紹介し、開発をすることを自分の仕事としていました。夜の11時より早く医局を退室したことはなく、年に10日の休みもありませんでした。密かな自負と高揚感にも浸っていた自分が腹立たしく、恥ずかしく思いました。もう一度勉強する機会を与えてくれた論文に出会えたことを嬉しく思いました。

この心境は1960・70年代を寝食を忘れて咬合論や咬合器に頑張ってきた人でないと分かるまい。後の時代が先の時代の50年間を「どうして、それに気が付かなかったのか」と一言で断罪することはた易いことです。しかし、時代と言う目隠しに加えて一切の資料がない中では気が付くこと自体が不可能だったのです。

戦後日本は半世紀遅れて米国から最新補綴学をようやく取り込むことができました。1960～70年頃の日本では、1920年代のHanau, 1930年代のGysi, 1940年代のMcCullum, 1950年代のStuart, 1960年代のPosselt, 1970年代のRanfjordらが同じテーブルの上で論議されていました。全てが未知だったのです。そして今なお、そうなのです。ですから、当時を良く知る私には、先生が果されたご苦勞への感謝は舌筆に尽くし難いものがあります。先生からの高い評価はうれしさよりも、知らずして犯した自分の罪をしみじみと感じさせました。

私の論文は、「だから過去の探索は重要なのだ」に的が絞られています。そのためには、日本にも歯科の古書の集積が必要とも訴えました。しかし、現実には「そうだ」と賛同していただける方々を不幸にするだけです。真実を述べるのは良いが、それは皆を幸せにする真実の吐露でなくてはならない。いかに真実とは言え、皆を不幸にする場合は、真実だからと言って公言は許されるか。

そのような思いから先生にお手紙を差し上げることにしました。これは先生への手紙とはなっていますが、相手は一般の読者宛ての文章になっています。大先輩の先生への手紙とすれば、大変に失礼な内容となってしまいました。すでに投函してしまった後なので、どうしようもありません。

一般読者宛てとはいえ、「そうだ」と賛同していただいても、だからといってどうしようもない。古書がない現状は依然として続いているからです。その中で、ではどうするか。それを手紙にしました。自分としては重要と考えたものです。以下は私が先生に宛てた手紙です。

\*\*\*\*\*

## あの情熱は、あの苦心は、あの達成感は何であったか。

お手紙ありがとうございました。

本当に起こるであろうことが起こっています。私の論文は新しいことを発表するとか、一つの見解に則って総説としてまとめるといった従来の論文とは、ある一つのこと、異なります。その一つのこととは、従来の論文が過去を典拠にしていないことを論点に置いていることです。

内外の論文は例外なく、多くの引用文献を列挙しています。にもかかわらず、Bonwill, Spee, Walker, Bennett, Gysi, Hanau, McCollum どれをとっても、この先人たちの真意が全く取り上げられていません。何のための引用文献であったか。それは自分の論文が多くの過去の知見を基礎として成立していることを示すためではなかったか。もちろん、この一文に異議は無い。しかし、この一文には裏があります。その別の意味とは、一見、過去を継承しているかに見せて、そこには過去への崇拝からではなく、我説を補強するための用材として過去を用いていることです。そこには自説に都合の良いように意味・解釈が変更されています。過去を礎石として高みに構築された高層楼閣も、その礎石のもとを正せば、作り替えられた過去なのです。過去という名の人造過去であり、形を変えた権力基盤でしかありません。

話は“過去の取り扱い”だけではないのです。現在の定義自体が補綴学の発展を阻害しています。補綴学が科学的領域であるためには、用語一つとってみても、その使われ方が各自様々であっては学問にはならないでしょう。では、Organic Occlusionをどのように定義づけるのでしょうか。GPT9(2017)には“anterior protected articulationを見よ”となっており、そこには“側方運動時には前歯部が臼歯部を咬合させない mutually protected articulation の形態 (form)”となっています。もともとこの語は Stuart が Shaw の論文から借用してきたもので、Stallard と共に「Organic Occlusion」のタイトルで論文を書いています。Stallard からは「この概念を普及させるための活動は、McCollum の意向もあるのもう少し控えよう。それよりも、もっと「Organic Occlusion」の概念の足元を固めよう。」とアドバイスを受けています。時期は明確ではありませんが 1963 年頃と思われます。Stuart・Stallard の「Organic Occlusion」の意味するところは GPT の定義よりももっと広いのです。GPT の定義は咬合を一層科学的体裁を整えることに貢献しているように見えますが、明らかに本来の「Organic Occlusion」の自由な発展を阻害しています。このことに気が付けるのも、Stuart・Stallard の論文を知ったからであり、この論文の重要性は“だから、過去の引用文献は重要である”とか“過去の取り扱い”を問題にすることではないでしょう。端的に、私たちはこの辺で、立ち止まってもう一度過去がどうであったかを振り返ることが大事だと教えているのです。

しかし、ここにはいくつかの大きな問題が横たわっています。

一つは、立ち止まってもう一度過去がどうであったかを振り返ることなぞできません。現今の学問の潮流は怒涛の如く流れており、都合の良い加工された過去を引っ提げて「歴史」なしでも学問は進歩すると言わんばかりです。過去を振り返るために立ち止まった人間は確実に遅れを取り、淘汰されてしまうことは火を見るよりも明らかです。たとい、過去を振り返ることが大事と思いながらもそれに時間をかけることは許されないのです。

二つ目の問題は、たとい僅かでも過去を調べてみようとしても、調べる過去がどこにあるのでしょうか。Bennett のようにオリジナル全文が現代にリプリントされた著名な論文は 5 指にも満たないでしょう。論文だけではありません。当時どのような専門書が出版されていたのでしょうか。それらの学術を支える資材・器具は如何であったのでしょうか。当時の歯科関係のカタログが欲しい。当時の歯科医師たちが

置かれていた社会状況は如何であったか。当時の歯科医師会の 100 年史も欲しい。

補綴学ばかりではない。歯内療法が確立しなければ、歯冠補綴の完成は無かつただろうし、歯周治療の発展を待たずして歯頸部形態の考察は無かつただろう。ことは単に補綴領域の過去にとどまらず、歯科医療全域の過去を知らねばならないことになる。さて、過去を振り返りたいと言っても、文献に限ったところで、上記の文献が日本のどこにあるのでしょうか。どこにもないのです。いや、少しはあるでしょう。各大学の図書館や、補綴教室の蔵書を集めれば…。しかし、どの大学がどのような著書を収蔵しているのかは私は知りません。

私が三重県にいたころ、東京歯科大学や日本歯科大学の図書館に出向いたものでした。東京歯科大学では、私の熱意を受け入れていただいて、コピーをとらせていただくことになった。しかし、古い文献はページを開くたびに“バリツ”と音を立てて本が割れた。さすがに、願い出た私からコピーの断念を申しあげた覚えがあります。筆写をしても限界があり、旅費や時間・宿泊費を考えると現実的ではありませんでした。高価ではあったが、古書現物を購入した方が現実的でした。当時はまだ 1ドル＝¥360 円の時代で、今にしては損をしたように思われるかもしれませんが、さて今、購入したいと思っても購入できるかどうかは分かりません。それはそれで良かったのです。

3 つ目の問題は、蔵書がある程度集まららないと古書研究は始められないのです。古書に出てくる論文は非常に興味のある引用が目を引きまします。しかし、その引用論文は日本にはない。よく利用したのは母校の阪大中之島図書館からの取り寄せでした。船便で 3 か月ほどかかる。取り寄せた論文の引用文献が欲しいとなると、また 3 か月かかる。このレベルでは古書研究というほどのものはできないのです。雑誌関係では、JPD, JADA, D.Items of Interest, D.Cosmos, D.Sammary, 版を重ねる専門書では Harris の Principles and Practice, Am.TextBook of Prosthetic Dent. が欠番あるものの流れがつかめるほどには揃い、各時代の単行専門書が揃いだすと、当時は出版量が現代ほど多くは無いために、引用文献が手持ちの書籍から見出せるようになってきました。過去を振り返るためにはまとまった蔵書数が必要なのです。珍品の古時計のコレクションとは異なるのです。それ一つでは何の価値もない。

4 つ目は、家族の理解です。

家内には、結婚以来これといった買い物をしてあげられなかった。けなげに私を支えてもらっている姿に不憫を感じて何とか 10 万円ほどの貯えを作った。これで、洋服を買ってあげよう。もちろん、家内は素直に喜んだ。丁度その時、一本の電話が入った。長年探していた Gariot の著書が出たという。それは私が長年探し求めていたものでした。Griot は最初の金属製咬合器の創始者として知られています。しかし、あろうことか Denton が 1933 年に D.Cosmos 誌上で「Gariot は金属製咬合器を創始したのではなく、石膏咬合器の製作法を紹介した」と発表しているのです。これは当時の、そして現在の通説を覆すものです。Denton の堅実な調査から、その記述は 10 行に満たない短いものであることが分かります。補綴史をするものとして、この Gariot の文献は、Denton の文献があるからそれで十分ではありませんでした。

「ところで、その古書の費用は？」と聞いたら「14 万円」の返事が返ってきた。10 行の文章に 14 万円は高すぎる。私は諦めた。しかし、家内はきっぱりとこういいます。「私は服はいらない。服はいつでも買える。その本は今を逃したら、もう手に入らないかもしれない。その本を諦めて私の服を買っても、私はその服は着ない。」はたして、その本は私の蔵書の中にある。くだんの記述部は 8 行であって、Denton の指摘通りでした。ことほど左様に、私の収集した本それぞれには様々な思い出がある。詳しく調べたわけではないが、イメージとしてはおよそ 3,000 万円位はかかったのではないかと。賃貸の借家は床が沈んだ。やむなく、蔵書に耐える家を建てた。全てを犠牲にして古書のために生きた。これはほとんど狂気の沙汰です。

医療者はことごとくの患者の救済者であらねばならない。しかし、家族も救済できないで、なんで他人の救済者でおれようか。

私は叫びたい。過去は大事だが、過去に入ろうとするなかれ。余りにも、費用と時間がかかりすぎる。それはあなたもあなたの家族も苦しめる。ただ言えることは、学術を研鑽することにより、患者の救済をしようとするなかれ。学術の研鑽は自分の救済法に自信や安心感を与えてくれるだろうが、それは本当のところ何の支えにもならない。確かな支えは、眼前の口腔に生起する種々の現象をしかと観察することにより得られる経験知識だけです。学術から得た知識ではなく、学術を通じた経験（観察）知識からです。その時の経験（観察）をないがしろにしてはいけません。学術知識が重要なのではなく、そのときの観察が重要なのです。では、その観察はどのようにすれば良いのでしょうか。それは先人たちが口腔をどのように観察してきたかを参考にすることです。本当の学術とは、先人が残した知識ではなくて、先人たちがどのようにしてその事実に気づき、どのようにしてその事実の現象を知識化（事実化）していったかを推し量ることです。よろしいか。知識（事実）はいずれ、修正され、時代と共に消えていくものです。ですから、知識（事実）が大事なのではなく、その事実に立ち向かった先人の観察する姿のほうがもっと重要なのです。

レオナルド・ダ・ヴィンチは言う。「眼から入れるべき事柄を、耳から入れようとするなかれ」

ミケランジェロは言う。「観察しなさい。観察しなさい。観察しなさい。時間を無駄にしないで。」

観察したことを記録に残していきましょう。その記録は後年あなたを助けるでしょう。

私の論文はあの1960～1980年を駆け抜けた先生方にはショッキングであったかもしれません。臨床経験の浅い若い先生方にはショッキングと言っても分からないでしょう。あの時代のあの状況は補綴の世界だけではなく、世界全体が異常な興奮状態でした。宇宙船アポロ8号が人類初の月周回軌道に載り1週間の旅を終えて地球に帰還しました。(1968.12.21-27.) 阪大の助教授だった三木敬一先生（後の北海道大学名誉教授）の言葉「宇宙飛行士は命を懸けた。顎運動究明のためであれば、必要ならば自分の顎を切除しても構わない」が印象的です。先生の手紙には全てが開拓状況の中、文物がほとんど無くて、それでも海外の情報の収集に頑張っておられたそのころの意欲の激しさが出ています。しかし今、あの情熱は、あの苦心は、あの達成感は何であったか。夢に見たアメリカもまた、実のところ、盲目の中を突っ走っていました。1960～1980年に青壮年であった年代の先生方は2021年の今は70歳～90歳、すでに、やり直すほどの時間は残されてはいない。若い人には理解してもらえないショックもある。残された時間でできることとは、若い人に自分が得た「観察こそが唯一の自分の持ち物である」ということを伝えることです。理論から観察を導き出すのではなくて、観察こそが理論を導き出せるものであることを、そしてそれしかないことを伝えることです。これは、直接患者を救済するでしょう。この直接観察法による直接救済法は理論を介在させる間接法の西洋にはない日本的な救済法です。教科書に求めることができない救済法です。この方法の重要性を実感できる歯科医師は1960～1980年を駆け抜けて、現在、あれは何だったのかを痛感した歯科医師だけです。だから、意味なき努力の半世紀であったというのではなく、この半世紀を経なければ感じる事ができなかった努力の方向をこれからの歯科医師に指し示さねばなりません。これができるのは、正に1960～1980年を駆け抜けた情熱的な歯科医師だけなのです。

本稿の目的は、過去が大事ということから始まりましたが、そこに入る人は必ず不幸になる。過去の大事さを知りながら、せめて先人から観察法を学んでもらいたいと趣旨変換し、さらには海外の文献に頼らず、眼前の臨床の種々の現象を観察し、見取ったものを理論化していく日本的救済法に到達してほしいという決着となりました。

「古典に会う日、その時あなたは、そしてあなたの臨床は変わる」 終わり